新しい時代への危機感

札幌市医師会
札幌西レディースクリニック 馬場征一（ばばせいいち）

新年あけましておめでとうございます。今年は午年、私自身は年男であろうとなかろうと関係なく例年通り頑張って参ろうと思います。

昨今、時代の流れのスピード感がコロナ以降は特に早く感じられ、AIに至っては年々頭脳明晰なツールになり、今やアナログ感覚の昭和は遠くなりにけりと、どこか過去を遠くの目で見つめてしまうようです。そのような視点から少し昨今考えておりますことをせっかくの機会をいただいたので、思いのままに筆をとっていこうかと思います。

人間の主体はもちろん自分自身のアナログ的な生身の肉体そのものであり、脳も勿論、その一つの臓器そのもので、USBやWi-Fiでどこからか情報をダウンロードやインストールもすることもできず、脳自体にメモリも増設できず、新しいハードディスクに置き換える訳にもいきません。

デジタル的なツールに囲まれたまま育っていくと、男女の出会いも出会い系のアプリでクリックして自分に合った？相手を検索してそれを鵜呑みにして交際、交際前後のデートにおける微妙な男女の駆け引きや、相手の顔色やしぐさ声色など様々な五感どころか第六感まで使った感性やら勘も育つことなく結婚、出産育児の人生のステージに進んでいきます。そこで産まれた赤ちゃんは当たり前ですが基本的に知識も何もゼロなフラットな状態から人生が始まりますので、言葉も話せませんし、自分の感情や状況をLINEで伝えてくれるわけもなく、例えば赤ちゃんが泣いているなら、赤ちゃん本人に何が起きているかを視覚、聴覚など様々なアナログ的なものをフル稼働して感じ取らなければなりません。乳幼児期のお子さんがとりあえず手っ取り早くYouTubeの動画を見せておけば静かにしてくれるだろうと、例えば食卓で画像を見せっぱなしで食事の時間を過ごして会話などのコミュニケーションをとっていない状況などはフードコートやレストランでも散見されます。このようなデジタルデバイスへの強い依存や熱中症の危険による運動量など、明らかに子どもにとってマイナス要素が重なり、体と心の発達が伴わず成長し、些細な転倒でも容易に骨折してしまったり、些細なことでキレてしまったり、我慢ができなかったりと、若い世代が全体的に人間としてのアナログ的な生物的な能力が、最近退化しているのではないかと杞憂であればよいのですが、大変危惧しています。

スポーツにおいてもデジタルの波が押し寄せ、例えば野球、日本はさておき、アメリカのメジャーリーグではデータのみによる「頭を使わない野球」とイチローさんが表現されていますが、選手がベンチで見ているのはipadなどでデータばかりを重視し、単にデータの通りやれば良いというチームの指示まであるようで、グラウンドで実際に相手との勝負で実際に対峙してどうなのかを感じながらプレーする野球ではなくなっているようです。そこに野球というスポーツ本来の勝負としての本質はあるのでしょうか？　今思えば選手の体格やスピードなどのレベルは現代野球より劣りますが、昭和から平成の頃の野球は選手自体それぞれの人間味も相まって野球の内容も含めドラマチックなものでした。

実際に様々な新しいことを体験・実感することをせず、失敗をすることのない生き方、そこから生み出される単なる思い込みだけは、立場の違う方のものの見え方や考え方を想像することが困難になり、結局は寛容さを失ってしまうことにもつながってきます。自分にとって耳当たりのいい都合のいい情報だけを集め、それしか正義ではない原理主義的な思考に陥ってしまい、不必要な憎悪の連鎖や分断を生む状況も産み出しているようにも見えます。

現代社会では、法的かつ倫理的に整合性がとれているから何も問題がないように見えること、それが実は最初のボタンの掛け違いで大局的には少子化や日本の存立危機にまで発展するのは、過去の歴史に起こった大事件などの最初の原因は些細なことであったように、本来早めの対策が必要です。政治的には何でもエビデンスが整わなければ動かないという大義や理屈は一方ではわかるのですが、研究結果としてのエビデンスが整わなければ大きな事件が起きない限りずっと不作為のまま、ただ時代が過ぎ行くのを見過ごしてよいのか？とも思います。